

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：13501
 研究種目：若手研究
 研究期間：2018～2020
 課題番号：18K13216
 研究課題名（和文）ASD児に対する仲間との協同を促進するためのスクリプトを用いた支援方法の開発

研究課題名（英文）Development of script-based intervention method for children with ASD to promote cooperation with peers

研究代表者
 吉井 勘人（YOSHII, Sadahito）
 山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：30736377
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）： ASD児の中核的課題の一つとして、仲間と協同することの困難さが挙げられる。本研究では、ASD児とその仲間との協同を促進するために、スクリプト（生活文脈）を用いた支援方法を適用し、ASD児の仲間との協同の発達可能性を検討した。協同のレベルを 仲間との動作的協同、言語を介した基礎的な協同、会話による発展的な協同の3つに分け、各レベルで支援を行った。その結果、各レベルで、ASD児の仲間との協同活動が成立し、日常生活場面における仲間との関わり方にも変化がみられた。以上より、スクリプトを用いた支援方法を契機としたASD児の仲間との協同の発達可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ASD児の中核的課題の一つとして、仲間と協同することの困難さが挙げられる。本研究では、ASD児とその仲間が協同して活動できるようになることを目的として、「クレープづくり」や「電車遊び」をテーマとしたスクリプト支援を行った。その結果、ASD児の仲間との協同活動が成立し、日常生活場面における仲間との関わり方にもポジティブな変化がみられた。以上より、スクリプトを用いた支援により、ASD児の仲間と協同する能力の発達の可能性が示された。

研究成果の概要（英文）： One of the core characteristics of ASD is the difficulty in cooperating with peers. In this study, we applied intervention method using scripts (life contexts) to promote cooperation between ASD children and their peers. Then, we examined whether script-based intervention promotes the development of peer cooperation in children with ASD. The levels of cooperation were divided into three: (1) behavioral cooperation with peers, (2) basic cooperation through language, and (3) developmental cooperation through conversation, and script-based intervention was provided at each level. As a result, ASD children's cooperative activities with their peers were established at each level. In addition, the children with ASD changed the way they interacted with their peers in daily life situations. These findings suggest that the script-based intervention method may promote the development of cooperation with peers in children with ASD.

研究分野： 特別支援教育

キーワード： 自閉スペクトラム症 仲間 協同 スクリプト

1. 研究開始当初の背景

二人以上の人と一緒に物事を行う協同は、人が社会生活を営む上で必要不可欠な能力である。ASD (自閉スペクトラム症)児は、社会的コミュニケーションと対人的相互作用の発達に重篤な障害を示す。その中でも、仲間と協同することの困難さは、中核的課題の1つであるとされる。従って、ASD児の社会性の発達支援において、仲間との協同の発達を促進する支援方法を開発していく必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、特別支援学校(知的障害)に在籍するASD児を対象として、仲間との協同を促進するためにスクリプトを用いた支援を行う。そして、スクリプトを用いた支援がASD児の仲間との協同の発達を促進するかを明らかにすること、加えて、ASD児の仲間との協同の発達過程の詳細を明らかにすることを試みる。

3. 研究の方法

スクリプトを用いた支援とは2つの特徴、すなわち、食事、ゲーム、制作・調理活動といったような参加者にとって身近な日常生活の文脈における相互作用を定型化して反復すること、子どもが自発的に他者に関わるための手がかりを与えること、といった特徴を有する支援方法である。

本研究では、ASD児と仲間との協同の発達レベルを、仲間との動作的協同、言語を介した基礎的な協同、会話による発展的な協同の3つに設定する。そして、各レベルにおいて、対象児に対して、仲間との協同の発達促進を目的としたスクリプトを用いた支援を行う。

4. 研究成果

ASD児の実態に即した適切な支援を実施するために、発達研究の知見を基に、仲間との協同の発達支援プログラムを構成し、仲間との協同の発達を、動作 言語 会話といった3つのレベルで設定した。各レベルは、次の通りである。 仲間との動作的協同：対象児は仲間との間で目標と役割を共有して、仲間の動作に合わせて動作することで協同活動ができる。 言語を介した基礎的な協同：対象児は仲間との間で目標と役割を共有して、仲間の発話(単語)や動作に合わせて協同活動することができる。 会話による発展的な協同：対象児は仲間との間で話者交替のある会話を通して目標と役割を共有して、協同活動することができる。

以下では、各レベルにおける支援事例を報告する。

(1) 仲間との動作的協同(吉井・青木, 2021)

特別支援学校小学部に在籍するASDの男児(CA10歳5ヶ月、DA3歳0ヶ月)とその仲間(男児)を対象とした。対象児は仲間の動きを模倣することはあったが、仲間と目標を共有して相互作用することはみられなかった。そこで、仲間との動作的協同活動の遂行を目的として、「友だち列車」スクリプトを設定して、16回の支援を行った。「友だち列車」スクリプトは、歩く役割とフープをかける役割に分かれる。対象児は仲間とフープを一緒に持ち、楽曲「友だち列車」が止まってから、歩く役割のターゲットの子どもにフープをかける役割を行った。対象児の自発的な行動(フープを一緒にもってかける行動)が見られない際は、段階的援助を行った。その結果、対象児のペアは、歩く役割の児と一緒にフープをかける行動ができるようになった。加えて、日常生活における仲間との相互作用では、対象児は仲間と協同活動ができるようになった時期から、仲間への援助行動、共同行為の要求行動、共有行動がみられるようになった。これらの関係から、動作的協同活動の成立がペア間での親密さや利他性に寄与した可能性が推察された。

(2) 言語を介した基礎的な協同(吉井・原・青木, 2021)

特別支援学校小学部に在籍するASDの男児(CA6歳11ヶ月、MA3歳3ヶ月)とその仲間(男児)を対象とした。2名とも多語文による表出が可能であり、日常生活での大人の指示は理解可能であった。対象児は仲間への単語による働きかけや模倣はみられたが、仲間との間での相互作用が持続することはなく、仲間との協同活動もみられなかった。そこで、仲間との言語を介した基礎的な協同活動の遂行を目的として、「クレープづくり」スクリプトによる支援を8回行った。「クレープづくり」スクリプトでは、道具として「クレープやさん」(玩具菓子)を用いた。水を入れる 粉を入れる 混ぜる 広げる 電子レンジで温める チョコをつける といった行動系列における各役割(~)を、子ども同士で話し合って分担して、道具を交互に使用しながら協同して作る取組を行った。なお、対象児の自発的な行動(例：道具を仲間に渡す)が見られない際は、段階的援助を行った。その結果、対象児は仲間に対して一方的に行動することが減り、仲間に質問してから行動することや、ペアで交互に道具を受け渡して協力してクレープを作る協同の行動が増加した。加えて、日常生活場面では、対象児が仲間と掃除の係を自発的に役割分担して協力して掃除する姿がみられた。以上より、ASDの子ども同士の協同活動を成立させる要因として、動機づけの高い活動設定、相互作用の構造化が有効であることが考察された。また、共同行為を通して、ASD児の仲間への関心が高まったことが推察された。

(3) 会話による発展的な協同活動(吉井・青木, 2020)

特別支援学校の中学部に在籍する ASD の男児 (CA11 歳 5 ヶ月、SA7 歳 4 ヶ月) とその仲間 (男児) を対象とした。コミュニケーションの評価では、対象児は文レベルでの言語表出が可能であり、経験した出来事について質問されると短い文で応答することも可能であった。大人との間で 2 ~ 4 ターン程度の会話が持続していた。協同に関する評価では、対象児は、目的地まで仲間と一緒にペースを合わせて歩くなどの動作レベルの協同活動は可能であった。一方で、ペアで話し合いながら課題を解決する場面では、対象児は課題から意図的に逸脱すること、ペアの仲間にコミュニケーションを始発することが乏しいこと、また、仲間からの発話(質問など)に応答しないことがみられ、会話を介した協同活動の成立が困難であった。そこで、会話を介した協同活動の成立を目的として、対象児にとって関心の高い電車をテーマにした「フラフープ電車遊び」スクリプトによる支援を 4 回行った。支援の結果、対象児と仲間との間で、協同的関与が成立しない状態から、言語の話者交替による協同的関与が成立する状態へと変化した。二人でフラフープ電車にお客を乗せて走り、対象児「ここが〇〇駅です」 ペアの仲間「お降りになる人はいますか？」と二人でお客を目的地まで運ぶという目標を共有して、お客に言語で話しかける始発的な相互作用がみられるようになった。事前・事後評価として実施した対象児と仲間との共同の制作活動では、対象児の仲間への始発的なアイデアの提案が事後評価で増加した。以上より、スクリプトを用いた支援を契機として、ASD 児が仲間に対して自発的にアイデアを伝えたり、質問したりして会話を行う、話者交替を介した協同活動が促進された可能性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉井勘人	4. 巻 31
2. 論文標題 共同行為ルーティンまたはスクリプトを用いた自閉スペクトラム症児へのコミュニケーション・社会性の支援方法の現状と展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井勘人・若井広太郎・中村晋・森澤亮介・長崎勤	4. 巻 31
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児における意図共有を伴う協同活動の獲得過程：特別支援学校の授業における共同行為ルーティンを通して。	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 105-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井勘人	4. 巻 28
2. 論文標題 「掃除」スクリプトを用いた自閉スペクトラム症児と仲間との協同活動の発達支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉井勘人・原満登里・青木雄一
2. 発表標題 知的障害を伴うASD児同士の協同活動の発達支援：「クレープづくり」共同行為ルーティンを用いて。
3. 学会等名 本発達心理学会第32回大会ポスター発表．29PM 3 - 3 B-PS 8．
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉井勘人・青木雄一
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の仲間との協同活動を促進するための支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会ポスター発表．（2020福岡大会）P 8 -51．
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青木雄一・吉井勘人
2. 発表標題 特別支援学校（知的障害）におけるASD児の共同注意の機能を高める支援：SCERTSモデルを用いて．
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会ポスター発表．（2020福岡大会）P 8 - 2．
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関